雲萍雑志

柳里恭先生随筆

雲萍雜志

東都書林　玉巖堂

江都横山
街玉巖堂
精選古今
書籍發兌

3861

雲萍雜志序

柳淇園之爲人天資風流温
雅而猶且胷中之洒落世以所
知也常以書畫交遊一時
有名之士無不往来者都鄙
藝苑之客無不識淇園者其

藤[illegible]氏藏書

平生随聞所録積年重日二十餘巻多是勸懲之話説也手澤之本遂為予蔵弆須中井某者撮其旨趣補其缺畧題曰雲萍雑志予曽毎用暇寓目則如對其人焉聊弁数言於巻端云

丙辰之秋日

浪華薫蔭堂主人恭識

予が性遊歴を好ミ名勝旧跡を探るの癖あり西遊せし折から浪華の蒹葭堂を訪ふ雅談暑を移すに至る時に主人一書を出しこハ柳沢淇園手沢の随筆なりといとおもしろきものなりと見せらるゝを読に世のまめ人のをしへともなるべきこと少からず手写をこひありつゝあるをやがて一本をうつしつゝひめをきめしを此ごろ書肆北ともめによまく乞ひよせらるゝがゆへ

あらね掘花園のあるじ識

柳沢淇園伝

淇園柳沢氏諱里恭字公美一号玉桂通称権大夫大和郡山侯の士なり文学武術を始て人の師たるに足る藝十六に及ぶとぞ仏学さへ心得ありて倶舎論を暗じ僧も及ばざるところや中にも画に長じ朱舜水伝来の彩色の法を紀乃祇南海に学てより人物の没色世にこれを賞す水に漬し力せて揉洗へども落ずとかん為人曠達不拘小節を好みて才不才といはず客舎せしむるもの幾人といふ数をしらず或ハ乞めに来る者年をつゞけて置さず家禄多けれどもこれがために乏しきに至る初年の年侯使としく登極の大礼にあづかる郡にのがりし後ハいで大雅堂にまねきて歓しこれより往来

たとへばある時大雅大和に行しに路費盡たれば夜更に至るまでも
て是を償るに錢の如くこそあれ門を閉て置ざれば家臣又いふと
あり妻子さへ有りて内を好まずまた病を除免なれば多欲乃
ために身を亡しなんと憂ふとふこゝに大雅諫く西由を流
て回めし妻子笑ひながら占らん迄なす八束に罷んと主人が越
やりく諫にも従ハず置しとせしとまた門を堅く成てゐるうし
む大雅終に妻北垣を越て逃しとえ又ある府に八從者數多引
つまつる上手て師弦をも一女乞丐の絃なして錢を乞ものにあ
ひくしやかくし三絃をとりて自弾すさびて興ずにかへりなをらつく玄
まさかとより妙手なき凡鄙人の不意に出るハ王子猷に似
たりまやいそん玄を好む八鄭莊孔が渙の風あり

近世畸人
傳採要

○

雲萍雑志巻之一

柳里恭 稿

京ちかく大佛の餅饅頭流行しころ上方にて商ふうちに四條縄手に饅頭を鬻ぐ者江上味といふものあり或時見世先へ乞食来りて饅頭錢十ばかり賣りくれよといふに主人いはく来く非人にても商ひせんと云乞食のいふやう錢これらとるとも門にし人あり錢をもりて買ふに商ひのれをいかで賣ざるやこの理りを聞べしとて罵りけれども主人は御挨拶もなくて居たりけるが罵るをあまりにかしましければ主人見世先へいでさらばその譯申し聞すべし下に居れとて乞食に向ひ汝など乞食に賣ぬといふるその子細は乞食とあなどりて其菓子を食ん

とかく不所存いたしなくさなし無益なれども耳なれバ気もなく座しと乞食がかぶりたる手拭を捨るあきなつる饅頭屋の世の常乃製するハあらねバ殊に上品の菓子造りたる売き方もなくなる菓子なりさなくば乞食などの分際にて食べき品にハあらざる事なりしかるに家の菓子を食たく思ふ人なくしのかれとなりたく後に求めて来る人し汝諸人のあきれてと歎きなり寿命を保つべく身を以て殊あればとて上菓子を食ことのあるべきぞや世をおさまざる不届な様なりとて行べき事なり治ていへ店先を塞ぐべからずといつて叱りて追立られバ乞食ハ路をえく何処ともなく逃失ぬ

世を治めたまふ聖君賢主ハ一言もつて天下の規則となり給ふ倫

言汗の如し出てふたゝびかへらざる徳あり武家にハ二言なくてふたゝび出たる言を違へざるハ侍たる人の常なりされバこそ農夫町人などハ大かたの人も武士に二言なしといふことハ知りつゝ我らおのれハと己より不料簡をおこしてきのふ約束したることも飛ばしてふ違ひ今いひたることを保ちかねて義理をかく輩すくなからず多とひ農夫町人たりとも義を守ることとなるれバ人の家もとこのたがへざる所なりある家にあるじ五十の歳のころ妻乃身まかりけるゆへ後妻をむかふるに年ハとらじ客の悦に来りて酒宴を催しありしにあるじハ五十五歳なりしが後妻ハ廿五歳なりけるが二人とも其席に出ともに客をもてなしける主人挨拶のうへあく座興に乗じて云けるハ私ハ五十五歳にして二十五歳の妻を我

睦ごとくまどかに打とけなし　といへども縁のつきたるところにてより
ところあらざればなるべし　志かる上ハ悴に再し　面目をも失ふことに
至かくなりびたるやうすを見る悴が妻にして相應の年ごろ
なりといひながらわづかしき好妻とぞ其子と終にひそかに通じて父
子居ることかなはで他國へ奔り出て夫婦となりけるとやその親
の一言より若輩の心ぐるしき基と家督取る人ハ多言を慎
べし多言ハやぶれあり識をもとめ身を亡すハ昔より農夫町
人なりとも一言にて知るべし　一言にて不知を得るハ古人の識
やつゝしむべし

ある人ハ時刻を知らん為にとて自鳴鐘を求めんとするをその
妻是をとゞめていひけるハ明くれにかゝる世話のなるものあらずなるひ

たる物からにハその隙を費し自鳴鐘にかゝりて時を失ふべしと
なかりけんやめにへといつさきありけれバ庭鳥を飼べしとのふかけれ妻又
いさめて云けるハ時刻ハ人の心にあり汝の落千も一生をおなじ
かるべし自鳴鐘を飼りとするハ勤めに怠るのくせなれば上なし
と是を深く戒めつひに鶏をも飼ずなりにき

山科の隠士ノ貫ハ利休と茶道を争ひ利休が媚ありて世人に諂
ふことを常にいきどほり又貴人に寵せらるゝことをいさく歎きつゝな
ほ人にかたりけるハ利休ハ幼ときハ信心も厚き人なりしが今ハ
志落なかりしもかはりて人も二十年づゝにて志の
変ずるものハ孔子や家も四十歳よりしく自ら業するの志気こそ
あれり利休ハ人の盛なることまでを知て惜かるその意和堺

知らざる者なり世のうつりかはるを飛鳥川の淵瀬にたとへぬれども人は移り変るとくられよまでも疾し如れば人あることの是非実土の堅きにあらず世界を無相と観じて軽くうけなるさきやうなれども人はなしけれど情欲限りあり知ればなを全うし知らざれば禍を招くの蓮乱は蝸牛のごとく家を背中に負く家は鍋子の他の知れる穴に宿れり蟄居しの生涯を名利には究まくるしむつきやこのとき是ありなんとぞ人間世を終るの年をつかるが書たる短冊を買ひ求め灰と成し風雅は身とともに終るごとく没しぬ無量居士と号す

夫婦の中は君しことも礼あるうちは弥よりかはしくその情至て深き又しくし礼を失ふ時は其情自然と薄くしく離別もまさ

貴きにあらず仁義遜譲も礼を厚うする其中だちなくては乃礼媚諂と背を合はゞ智は痴のごとしむかひ誠は嘘と嫌るさなれば心安ござるにも愛患ばかりにいつも同居と知るべきなり

長田の庄司が義朝を討しことを不忠と書たれども長田の庄司も尾張は野間の内海に平家に国より領地を賜はりて居けるが内海の庄司なる義朝妻縁によりて庄司を使りとして忍び居しを不覚といふべし庄司は吉田平の裔にして其の祖勅勘はとるにあらで尾張に配せらる子孫内海にのこりありける其里義朝の後鎌田正清その浮遁世して西仏法師といふ是江戸に国にありて武蔵相模の間に終るといふ是江に鎌田正清が其つさる薬師堂是なり

洛の清水寺なる音羽乃瀧ハ応永年間に新に水口を設けて此
ところへ水を引たりそのむかしハ音羽山のうち[illegible]へ落たりとい
ふ此瀧を汲て湯あミするときハ瘧を愈す事功あるをもて諸
人下流を汲里水上ハ東山の雫より一つに音羽の名をよびたれ田
村の社も清水寺のいまだ字剣なきなよ里あまたハ地主権現と
云観世音ハ此社地を借たる四系乃名なり庄を貸く表屋成
しらるゝ世間のならひ大坂にも此例し多し人も是といひし
所まだ産れざる地に在りて身を堅固に修め家を大切に斉ること
ありがたきにや八ことな他出に出世するもの多し夜々に居る時
ハ己まが我侭をかくまひまつ油断しく身をおとちぶ家をも失ふ
他に出ぬるときハ堪忍をいたさバ□しに堪忍く油断なけまじバお

のぼる身を治め家をとゝのふかくまでも故郷にあつく扨出さ
るれ心をおもさバ身を損ずるの道少なからず田村明神ハ在世乃
ミぎりも人欲の私するを嫌ひなく此世を救ハれん心浅からず
まけまでも庇張りて表屋をたてられぬことなどいとひ給ハざる屋
し凡人ハ唯身を修めんことをあつく故郷をわするゝことあるべか
らざるなり

貴人ハ高きまの御遊と云ハ人々つどひぬひく談話の中にひと夜ハ無
言なく戯れなふをいふあり高き身ハ高くまる育といふ事を略し
方便の詞にて閑をとる事生尺五寸乃寸一尺をさらしても
のふ時ハ膝を折なく供と何業の扣添せられしことあり今やすいの
せざ絶られしといふて

よきことをせんとするその業を難し只あしきに移るまじとたしなみ
を附ぬることぞ執行なれ執行ハいろ／＼といふ限なし身を修むるま
ですらハ紙執行とりわけて婦女子にハおのれが一箇の料簡なる
べく身を立んことをもとむべく其の親に教へらるゝ手わざ女の縫ふことな
どをバ好みして音曲遊藝を習ひつゝを捨置くハ親兄弟の過ち
なり是ハ人を便りとせざる育やうにて縫つむぎの事を志らざれバ
女の性をうしなふその智男よりまさるものも忘おのれをたかく
ふうが嗜むりをきこせざれバ人倫にたがふてふるまひ出来れ
されバその身發明たりとも深く隠して人の發明を常に嫉むと
よく身を慎むべきことのあり

ある人文盲なるものを異見して世乃文盲者此の事ハいはず唯
堪忍の二字をよく守るべしといへり文盲の人ハ比をとりさむけかんに
んとハ四字にこそ侍らずやと指をおりてかぞへ此評にハおぼつかなし違ふ字
るべしかんにんと四字に書侍るといへバ異見せし人云愚昧の人なれ堪
忍とそたゞえのぶをよくて二字なりといへど又かぞへをかさむけさえ
あのぶなくバ又一字ふえてり五字と成侍るべし何と仰せ候とも
孤陋にハ四字と思ひ侍れバ四字なくかんにんハ守りて侍るなりといひ
つるふその人文云段が妙き愚昧の文盲ハ実に諭しがたし人ハ皆
て其同様なりおのまゝあるにまかすべしと大いにきどわりそれバ文盲の
人笑ふ何とも仰あるべし孤陋にハかん／＼此四字を知り侍れバ悪
口せられても少しも腹立侍らざるなりとて笑ひ居しとぞ其れ
智者ハ及ぶべく愚者ハ及ぶべからず

江戸にて予がしたしく交りし友に佐伯何某といふ人あり書を好みて食事の傍にも見基とする多く書籍をひろげ置て見居たり其行ひ篤実にして常に机上には書をひろげども要くて是は上手なれば一冊たりとも巻第の出し入をつくして是を戴きしなりつゝみて丁寧に珠にて包りたりこのふたゝびある書林の見世に書籍をならべおきたくその上をまたぎ或は踏こえなどするを見ていかの書林は出世なり難しといへり　又他の書商の客来りて求る時は其書をいたゞきては出しいたゞきては之へるを見てやがて上もなき書肆となるべしとて悦びの宝文なるが大学章句の序文に身を修め人を治る計なりにおいて其いまゝ略しをすこしく補なへんばあるべしと云所を見ては浅をなかりして人と生れてもその志すところ儒者なれどといへどもかくありがたきことのなりがたく只いかく及もそのことのことく至りしてはいかにも此人は引に大学に能得とあるに聴るを聴り聴る人に僧法師なども乃ちなりのやうに心得たるものあまたとも常の人にしても五常とよく悟り得ざれば身にも行ひ人にも義利さるものにあらで世に聴る君は稀にして只知りたる人のなき多しといへり実に確言といふべし

世に云行に詐りあるものを見え坊とて識ともなり見ては先礼は端なり見えなきは大かたは不礼なるもの多し人も自負するをかくて悪人とも子勤るに自負も亦其なるべし自負にも見えにも善悪あるべし何る人大酒を好く放逸にして

按ずるにいにしへ唐土の劉伯倫李太白にならひて人間一生縁
てきの世をおくらんとおもひ東坡も行なひけれバ人をしてく従ふ
志むるといへども予ハ一日も酒なけれバ俗なくしむつかしと思ふもの
くる人も酒なるべしとて飲ませざるにすゝまず日々に五升ほどを吞
づり此人に何の功ありといへ共酒飲事を一盃と自慢して外
にハ格別の能もなし能なし猿が大酒をくらふも何を知らし
ろき人とハすべからず劉伯倫李白ハめでたしの学士ならく天
下をも治むべきほどの器量ある人なれども佞人上にありて賢
者を退くる世なりせバ用ひられざるをしりて自さけてその才
をかくし時を憂ふる心よりして届かぬ事を歎息してその我忘れ
んとて飲む酒なれバ大酒をくらふもげに知りしろきふるまひ
ありとく天下の酒客共もいふべし只酒好なく大酒するやからも
生縁此糟啜ひありし人も器物もつかひるれバ換べし法ふれバ于奥
ときも換ず自災ハ子中庸ありて不及なきハよろづ至くた
とそり

○

小人閑居して不善をなすといへども小人なればこそ閑居し
て不善様形すめのあらら次されバ独居此閑をたのしむをハいと
かし大きさハ様なく隠居する筆世間に多し自得して世塵を
さけ悲ひするべき我道るゝ其の名格別なるく隠居しなから
物を貪り世務に執着するハ隠居にハ似らず隠居にあらず近世ハ
隠宅に標札多かるにても知らまてゝ

○

愚者ハ不用の財を貪るに労し賢者ハ用の財銭浪る事楽

○

む不用の材ハ限りなし用の材ハ限りあり限りある用を以て限なき財を求れバ死に至るまで貪欲尽ることなしされバ身を労して材を聚る時ハその身終りり用の材ハ用の足ことの楽むがや易子書を書ふ材子不用とひへとあるべからずと我身のうへまでも日用の外を徹する材ハここ子不用の財なり

昔奈良に礒貝といふ墨師ありけるが父世に在すころまでの家盛なりしが代々墨を商ふ人多く職人も数多抱りけるが人の妻と密通の事を隠れなくし此地に家をも置かねて乃妻も共に奔りて近江の大津辞に手跡の師となりて世残送りし五年ほどを過て後この妻の奈良に捨置たる女子父におくれて頼もなく人を頼めかく母の大津にありと聞えていぞたどれども便をしらざる若ごころよるべなき箪ゆく京にある門に立此女ハそこのかしこさまよひありくうちに着たりつる衣裳をそこばく乃こゞねをも奪ハれ終に其乞食となりて大津にいたる時雪の多く降りけるころ礒貝が住ける家の軒端に女子此乞食薦をまとひて打臥しなやめる声の聞えけれバ夜半に礒貝ハ扉をひらき何かなにひとりの女子なり不便に思ひ妻にこのよしをいへバ妻も哀に女子なることを思ひつつかく介抱して内へ入れ土間に莚を敷つかせて臥さしめ明日を待て出しやる時何処のものぞ父ハ果なきやと問へバ答へて奈良の角振といへるところの若者なるが母の身おちぶれて人にかゝへられし家もなく今ハ父も家もなく成り

家のあとつぐべき君もあしきこと何となく何国へか行侍りしかバせんすべなくて母の大津にましますと聞て尋ね来つれども今は逢ず乞食となりしハ京にてあしき者にたぶらかされて袖乞せしといふなり彼見夫婦ハよくよく見るに妻が子なりけれバもの思ひものでんど哀といへる乳母のちからにある残んの文ざくくて送りしがそこに志ざし住しめおきし孫ハ他人に嫁せしむこそ人の因果ハ宿世の業といへども善悪の應報三世ハまさんにやくく現世に報ふことかくの如し

江戸葛飾のほとりに擁多摩といへる村落あり何ろ年の春伊勢大神宮へ太々神楽を奏せんとて村民十三人ともに御師何某の家に宿るに山海の珍味を盡し馳走ありて後おのおのに薄茶まゐらせんとて案内して茶室へ招待しけれバ人々村長を始として十三人席に居けれバ御師ハ丁寧にあいさつしてんを取り茶を建て擁多摩が前に出しおきけれども農夫の身なれバ茶席の心得ハさらさらなければ大きに心をくるしめ誰もそこそこ思ひはからひて飲つぎや人の呑に任し茶ハ飲さる上手で吸にまはさんとせしが十三人へ一杯ずつなれバ茶を飲うけまはしたりとも足るべからず又ひとりして飲て他の者へ算あつせんをいふなどとも見れバ村長の身として今更異やく飲まんも口惜しきとおもひとまどひしかれこちに思ひめぐらすにちまた御師ハ先に出せし吸茶菓子を村長が前へさしやりいざ召上りて志ゐなれバまゐると茶を立あげて残らず飲みあまて

きりましたれバ御師（おし）いふて茶挽（ちやひき）をさせ又其（その）村長（むらをさ）がまへに出（いだ）しつゝいざ菓子（くわし）残りみてとゞふこの盆（ぼん）ハ菓子（くわし）をもて食（く）ひまさせ茶（ちや）をのこさず飲（のま）くおまへにおきけれバ御師（おし）又とりてもとの如（ごと）くなせて又村長（むらをさ）がまへに出（いだ）す村長（むらをさ）いひけるハ我（われら）もはや沢山（たくさん）ござされくりかへしいふにさあらバ次（つぎ）の方（かた）へおくりあるべしといふこの吹（ぶかん）にて各（おのおの）一挽（いつてうん）づゝ飲辞（のみどさい）しく座（ざ）しきへ入（いり）おのおのひそかにその人労（らう）をゆぎりつて聞（ぶ）し又も茶（ちや）の饗応（きやうおう）あらバいろばり迷惑（めいわく）すべしおやくいと困（こん）しく寄（きゝ）すれバ志（こゝろざし）てあくるを待（まち）く費足（ひそく）せり後（のち）に権（ごん）を陽（よ）中がそとに来りて聞（きく）ひさきとのへこの事いりすることぞそし同（とも）なれバる色し去（すぎ）伊勢（いせ）にて恥（はぢ）を得（え）しと待（まち）まして茶（ちや）汁手続（てでき）を数（す）へなるべくことろざしの事（こと）を也（なの）

がくり今（いま）さらまよがくれわづかしく又口（くち）をしくおぼえしといふ事（よ）ハ大いにひろくそのわと八日（び）ごろに似（み）げなき不見識（ぶけんしき）の人なり農夫（のうふ）ハ農家（のうか）にて人を形りて農業（のうげう）のことにさへくりしろまず恥（はぢ）かしきこと成べし茶（ちや）ハかゝる淫遊（いんゆう）の手（て）すさびにしてその六日（こちふたよう）分に足（さ）らりとこれでも農夫（のうふ）町人（ちやうにん）などのいたすべきことにあらず世（よ）をのがれし隠居（いんきよ）の後（のち）などハともあれ其許（そのもと）めし茶（ちや）を学（まなぶ）なら一村（そん）ことごとく名ありてしたがひ農附（のうぐ）に怠（おこた）り田畠（でんばた）ハとぐころ不作（ふさく）なるべし村長（むらをさ）茶道（ちやだう）を知（し）らざるが為（ため）に耕耘（かうえん）収穫（しうくわく）時（とき）にさず　まだ国中（こくちう）百人（ひやくにん）耕（こう）しるく五十（ごじふ）人遊民（いうみん）あるバその国の所らず飢（うゑ）ぬづし百人耕（ひやくにんこうや）して十人（じふにん）おそぶがその生果（しやうくわ）しく豊（ゆたか）なりといへバ擾（ぜん）ま傷感（かん）じて茶（ちや）汁湯（ゆ）を服（ふく）するを心（こゝろ）をおもひさだまりぬ

○五倫恩とハ人として有り聖賢の示教よりいでゝ世業をなすの基人間安穏は大悟にして修身斉家の枢機なり是を守る時ハ労する事なくして家富栄へ是を守らざる時ハ衣服ハ何の為にか着る寒さ暑さを凌ぎ暑さといとはんが為なりさなくば寒からん着暑からず着れバ麁服にても厭ふ事あるべからず美服に奢るハいまだ寒暑の身に応へざるが故なり寒暑の外に心あらバ遊興に奢るもいとふものゝ何ぞかるべからん食事も何れ為にかする空腹をやめん為なりさなくバ添物ハ少くありなん添物なくて食は進まざるハいまだ飢は知らざる故なり飢たる時ハ糟糠をもきらハず家ハ何れ為なり造作ハ雨露をいとはんが為なりさなくバ無益は造作などれくなくありなん水火の災に家を失ひし人の軒端なくもいとふ者あるべからん妻も何の為にか持てる子孫を嗣がん為なりさなくバ子孫あるものハ妾なとももたぶしあるべし妻子あるが上に妾を持ち色におぼるゝが故に金財ハ何の為なり求むる世界の第一衣食住足らしめんが為なりさなくバ義をかき恥をも忘るまで貪る事にもおよぶまじきことにこそ

○飛喜百翁が利休を招きし時西瓜に砂糖かけて出しければ利休砂糖のなき所を食ひ帰り門人に語ひ百翁ハ人に饗応することをしらず我家にて西瓜を出せしが砂糖をかけて出せり西瓜ハ西瓜のうまくを持しあれをしらずなきやうなまひなりとて笑ひ給ひき

蕎椒をすゞれにて功能あることのあり続くれは菜種子さへぐの
能毒を記すといへどもさのみあらず五穀をそしりて酒酎醤油衣
服調度のたぐひ多く今の世時ハこれを生ぜしむ世の資とす
山野幽谷乃霧雰内湿露の気を避るにハ古の物に過ぐる

菜売し

唐の太宗の時州郡に寺院多きが為民郡これが為に迫
められて民耕田に餘りし殘しく是れ寺院を没入すべき
よし玄奘法師ハ太宗のかふやう西国に寺塔あるもまた濁
頑君常にかくざるものの此事を仰せありしより寺を没入するに
ことやみにけりとぞ

ある人の妻夫乃爪を剪ぬるをいましめていふハ辰の日切り爪
とるゆへいふべからずといふ侍の人これを聞ていひけるハそれハよしと問に
辰ハ龍なり龍ハ爪形して手かゞみず大切の日なりといふに
たゞこれ人笑ひてさあらバその外ハ寅の日などハ時をつくり
て雄鳥をすゝめらるゝにやと人ぐその妻大いにいきどほりぬる

女ハ力あの美しきが寵せられて人の心のしきを愛する人ハ少なき
子物ハ形のめでたきを好むに意れ甚しろき様なる人ハ少し
ある家の妻ハ美人乃聞えあれども妬心ふかくしゝく夫の放埒
あるをいきどほりつゝ常に争論絶ざりしがある時妬心の余り
夫の前にて縊死なりしが夫も大酒の為に吐血して死ありぬ
妻は名を寄せひ夫を溺たもしくよびり人ハ名よりも行ひに
あり松竹に子をせをいはひ鶴亀によりて代々栄しいたりしも

家を治るハ和合にあり　先生書生子なりと志るべし
斉州閭の高弟子吉志乃とふかめあり實母子孝養を尽り世
十余歳のころ家業に出て久しくなる時その母いとけなきを
まうけれんを抱きて吉志乃が足を洗ひつれバへしと云に背
かずしらく洗ひぬきたるに往せるりこの一事を以てよろづの行ひ
違へるところなきを知ましり篤実れ性人乃なねむを賢き他乃
人をたのめく異見をうし己れに敵するをものをよくするを以て
終にハあしき挙も随ひ陽抑を結のんぶしも形くして人
志りぬ隠逸を抱し家業れひと女ある時ハ往還にあて道を造り
溝あるところへ橋をかけ凡浮事のためれくに志を尽すときあれバ
てかぞふるにいとまあらず

○むかし江戸なる山の宿に大捌助八といへる藁の問屋あり助
八ハ人と成り性直にして義をこのミ義に遠ハざる行ひ
あるものをバ浮け義に遠ふもれも豪強乃士なりとも是
を許さず常に徳行ありて侠者の聞えも知らざる人なく
ざりき或る時過ちて人を殺せし其の捕れて町の番屋に
預られしが其君のいひけるハ大捌ぬしに逢まゐらせんと先て
の待まゐらバ今宵のところへ連行なされりといふにぞ興よし
助八ハふつつへ来まバいかなる者にやと早く行て何ゆゑにて
見志らざるものなれバその方ハ予がいまだ知らざることに形り
何の用ありて逢さきよしやにやと云れ者答ていへ
るにハ家に口論のことありてやまちて人を殺し待ちけバ死を

いきうるも悔ひざれども一人の老母あり我に死し侍る時ハ母必飢に及びなんとさるれ此ことを心にかゝり侍れバ一旦命助りて母を養ひ送りて後死につきなんと思ひ侍れバいかにもして命を助け給ハらんと涙をながしてひたすらに歎きけれバ助八始よりあらましを聞ひ孝心の者にもあるまじきながら口論より事起り過ちて人を殺すと云語に絶たる愚者といへども孝養の志ふかきをたすけつかハすべし母を大切にせよとくいましめを解きてひそかにかへらしむる此よしを聴に訴へおそれバ罪人を私に逃せし罪軽からずとて助八を召て罪人を尋ねおかずやおもく禁獄せしむべしとて三年が間獄屋にありしうち助八ハ病て死せり尸ハ弟よりの老同じ所なる易行院に葬るその妻次く助八が墓所にて自殺して同穴の契りむなしからざりし今にその寺にあり

○ある人予に画を学ばんことを乞てさて云やう僕画を学バんと思ひおそらくハ他の画様画くことをおもはずして富士と達磨とのミを画きたしとてそれも上手とならんとも求めず富士ハいかにも富士と見え達磨ハいかにも達磨と見ゆるやうにかきたしといへりこの翁尋常にきこゆるまでもいとおもしろしすべて是藝何にもよらず此こゝろをよくわきまへぬる時ハ過不及あるべからず

○ある諸侯隠居せられて別邸に宗廟をうつしまゐらせ朝暮廟前の拝ハ天地大恩の拝謝を述、主恩の拝謝先祖代々高恩の拝謝とのみ唱へられて他の勤行等し何宗の僧正といへるが

此の條にあたんえしさきるど後世のことハ恩願ひなきにあらねども
まいければ後世の事ハ予が願がたんにまた人の念じおくるが多
かれど又まことをもとめんと想ふ形り予ハ是よくねがふもとの
熟したるものに布施して後世のことハ覺ゑんと申されたり
此條よく後世は道をむきまつれもおしまざ
平氏の士は傳を書る中に難波次郎が篤孝なる一段のこと
を載たり次郎が母ハ小松殿の乳人に仕へて厳重大慈なさ
つながら全く家に六十にして小松にいたり揺がし難波に住居
居るところ蓬莱人を没し家きわめて貧しかりしが次郎
常に母に仕ふるをいよ〳〵恭謹にして農業のいとまに薪を負
て市に鬻ぎ身に被る事しなども母にハ滋味を盡せり後

平家に仕へて九郎を洛中にむかへ母を迎ふるに母肯ずしていく
云老姫来すでに六十に余まり世に在の日少し汝今宮に
仕へ身を立家を起す是時至るさあるに此老姫の為
にひかれて孝に慵らば名を辱す是好からざるべし
はれ欲念に足ざる都へおもむく栄耀にあこるは志し於ここ
て道への筆を洛に帰して自害して果たり次郎悲歎に
堪ずしてく志むしれいたるを乞ひ故郷に帰りて老母の子きあ
ことをとふらひ洛に立かへりて清水寺に供養の地蔵燈をいと
なみいよ〳〵忠勤をたげておまに済かりといふこの事平家も
のがたり盛衰記などに見えたるところ忠孝をあげずしてさあ
功も名き人のやうに志るし傳へたるて恨なれ人も悪のことを

○あしけれバ善人もあしくつねへ善なれバ悪人もよき人のごと
し難波次郎ハ無双の君子なれバ至孝謙虚なるなかう
づかれなるふいと口をしきを形らずやましその性なるところ君
くたる人をおはず実に治くなる士なりといふべき
一休禅師紫野におなせし時室町殿の宗にこころやすく参りて
物がたりのついでに御意見なやうハ君子ハ誉きに依ても
くしませども餘りにおつけに人を教化しあへバ在俗の輩ハ
物いまひなどいふやうのどもなりまく久りて弘通に便り
よろしで志しあるものも遠ざかり侍るなり不凡のやろ
ぞ格別凡夫にハなくめでたき事をやさせなみましさあろ
バ悦びて帰依し参くする者多かるべしあらゆる人ハよろしきこ
とハ己れがよくハかりおもひてあしきこともたゞちに化人ハえ入さめく
心得るなるひとなく侍るぞとやたゞるに禅師ことうにおしく心
得さりこゝく筆をとりてかひく
佛家に住在すまじバいましめを以て本として三宝の海に入れ
ばまことを以て本とし身死して巖根に到りてハ骨まさ
浄し

○と書しなくこれより外にめで度をハ志らずとけなりとかや
都にて岩ちを予ちいふところありそこの念仏者の菴主を正
念誦とていふりもとハ愚谷に居て念佛の上手と呼ばれ日々に参
へいくる托鉢する人なるの声ハよきにそてて米銭多くなどこ
しくるゆゑ此僧も年ありて飯を焚たる所も極ふて済して肩に

の也持佛ハ家の位牌あるところと一遍づゝまゐりするなりされバ縁なく持来るの浮人ハことを含ませ自も含て家ハ佛器形どへも差ても供せず茶湯もこれと同前なりされバこそ何なくも佛前へ持出ることあるされバ含することなし濃抽の驕ちふも居るき初ハ境内ニ建るる地蔵を持来りるく境持よくつけて下さまるしさくの也ゑきるり統くるく札でく札ゆるまひして夏ニ相なるをそ内食すまいこも変して末ふて含するをもれし女犯もあるまじとハ思ハれねどちまみハ老婆めまる嬉ひさく下根下男のこと仕へり此正念が書くる一枚起請と辞世あり

隠居一枚起請

もろこし我朝のもろ〳〵は智者達乃沙汰しやさるゝ隠遁の隠ふもあらず又学問して色の道を悟りていふ隠遁ふもあらず只名聞の君は為にや世は嫌ともあるまじとさへ思はれバ頼ひなく気楽なるべしと思ひ入りて隠居するより外ハ別の子細はさむらはず但し肝心の世さうりと申ことのいへどもこゝ衣食住はちに有りけれ二つの外ふ欲深きことを存ぜバ諸人のあはれみにもはづれ仮令薦をかぶり糟糠をなめ人の軒端ニ臥するとも念ては美食ハ撰ぶ者か代はありがたきを忘れバ身そ安楽ふなりさまとも生さるうひもあるまじく候なり

辞世

来くしてもまてよくも皆目じをこゝろでちよつと死でみよふから
此法師君常の老ももおもたれざれども京にてハ只念仏坊
ず
主さずらりよびく其の行状を知る人まれなり
有馬に湯あみせし時日暮て湯掛此中両年同気の者なき
痩法師乃ひとりなりしとみゆるを見るく夜ハ大に驚き逃げ
より窺ふにちからなく湯あみして出行く姿骸骨の浮むさ
がなこゝろなし狐狸ともれ見れどぶかられにやとその夜ハ湯
にも入らで閉じぬ夜あけて此事を家あるじにかたりけれバ
それこそ行いかしハ其りおふ人なり彼女尼ハ大坂の唐物あき
人伏見屋てふ家の娘にしきうも美人の聞えありけれども
姑の病しおハせしとき隣より失火ありて火の手はやく病床
にせまりしかどたすけ出さん人もなかりしまてそゝの尼とび入てやうやく
抱へいだしまゐらせし人なりその時焼ただれたる疵にて目ハ
潰ぶれたりしに明て猶見えにぞ五合ほどあれど食ふに事たり
今年はや七十歳なりしとぞ聞けりといへるにいとあり難き人と
おもひく後も行ふかしハ人にもらさりけるぞぬ

○浪華に紀伊国屋赤右衛門といへるも大家の商人なりけるが
そのころ年まだ若かりしころ本家何業につくべく正直な
るが也宅に主人是をあはれみその才にして家につとむるすく丸
十余年なれども明くれ心を尽し妻をいとひ家業を大切に
する壮志酒色にてそりその褒美として金百両のもとでをきつく
すなはちハこれをもて何処へなりとも其の才がんに任せ家をを

稼ち出精して千両の利倍を重ねずんバ再び己が家へつぞ入る
べからず。ゆへに亦たゞハ小商ひの百両を元手として私
と称しいと女をつけて京都に登りつゝおぼつかなき商内の
多かる中に大商して大利を貪らんとする時ハ遂にハ心
損失あるべきこと常なりうれバ日々に費え出るものを失ふて
渡世とせバ小利といへども益あるべし其中紙ハ利の薄きこと
なれど日用多きものなれバ唯漉紙の捨るべきをあきなふ
べしとて西の洞院に所帯して漉紙を業とし紙屑を買ひて
漉かへしハ売りなるハ百両を元と手にして拾とせなりしかど
ハ三百両の利を得つゝ又その金にて広く家業を致しける
にまた五年に千両にもなりけれバやがて洛華にいへる主人

にまみえてかねてハかりし百両をかへせしるしもぎつるなどに千
両にハ預し待りぬまゝ主人へもよしやのべられしに主人大
に感心しそのわが家に勤しころより常に怠らぬ志と
思へるやさしくおもひつけらるゝことありしてよびハあれ千両を持
外二万両にすゞしとおわりし生バ又五とせをへてうちうち
に一万両に倍して主人の教へので風雅しける生バ主人まく大
に感心して二の一万両を三千貫八十万両にして見せべしと
いゝしを亦たなりし一年ありや否やハ八と云めハかりし百両を千
両のうち三千両を一万両にハすべからずハ又ね失れ待れど
も此一万両残十万両にあきんとて何の子細かさむくべきとて
三とせも経ぬるに廿万両に倍して来れバ主人その働きを

感じしく其の辛抱しての上にて差図すべきにもあらねどこれが袋も百万両にも倍すべしといはれバ尓蒔たるこそへるるも十万両のこがねを以て百万両にするとハ辛労するに足らざるなり　さて此倍の数とあり當時主家の御親類いかなどの恩儀へふかく倍るものと問へバ主人こたへて親類子ハいかなどくいふかぎりもあらざる所りといへバされどのたくさんおかしても其の上にも捨こがねとおぼし召さるゝにやといへバ捨ぎしどやりなこといまだ飽ことをしらずといふに実にさなりけるハさあらバ此こがねを倍することを足を限りとしてなきなれバ是らにハ命こそ宝なれ命ありてこその財あり命なくて何の財ありても益なしとかの主人云是ハまことその字とハ心得かくハあるゆゑに遠ざかり財を捨ててこそ世にあるまじひと何れ命あつてとて財なくて生くれるひまじと思ふといへバ亦まことに十万両を主人ハそのまゝなりけるまでのとハ東公の家なれバ仰にまかせ今より家弟子にて願ひの侍るバ暇なりてこのかへれをハやめしまへりしといふに両をもちて帰り家子の若干のこがねを縁ある小弟子に配り分兄弟をしまひ隠をそり円智坊と改名して大敷なる乃徒弟と成り京へいでて庵室をかまへ日々に托鉢して洛下終まりてその世うまれ老大歇なるに塚を建る石に刻める辞世の哥に

落ぐる約あらくの底を覗かんといれど欲のふかき穴ぞまずかなく

洛下須藤綸十郎といふ人あり敦厚篤実の道者なりしが

東山子寓居せしころ碓井子住けるが宇治を通りすることを
ハなくて利ある事きハ五条三条をはなれり遊里芝居などの
所ハさけて通らざりけり常に倹約をまもる事を専ら人に教訓
しておかずハ木にて鯛の形を彫ませ常に膳部のうへにおき
におきて一肉の美味須臾乃舌頭にあり大丈夫何ぞ飲食に心
をとゞむることをせんやといへり

生駒山を越る日秋篠といふ村をすぐるに如意輪観音を安置
する堂ありさすが名におふ山色風景郊野のながめおもしろけ
れバ此堂に立寄てたばこくゆらしけるに堂守がおもしろく行
目しひたる男の卒都婆を造りゐるを見るに其間細工せるを
にやといへバ削りかけしたる卒都婆をとりて熾く囲炉の傍るき

なししん寺僧共てやつびたる鑵子に湯をたぎらせ茶瓶のつき
たるに茶碗銭丁寧にあらひそゝぎて大坂よりめぐりし茶あり
とて鍋に煎じあたへぬ予も心よく二三碗を喫して志ばし憩
ふうち主のいふやう我家ハむかし此地の産ならぬをかうしゝも
調度仕さし物を職として二十一年なども京にくらしつれど
も不仕合なる事を打続き家ハより目ハおとろへしのみ
づかしく今ハこの地に老朽ぬる形を茶の湯といへるをもはじめ
ハなるすさびより起りなるにやなどいひつゝ菓子を椀に盛
ていだしつゝまへバ予とりてみるに麦の末に芽子味噌をくるく
く炮やきたる形り殊にしき口なるなとていとうまく食て茶数
碗をかさねしけるうち主人ハ家に在し頃数〳〵の茶人宗

茶道など訓練なさしめて茶席にも出で一席茶事することも習ひおぼえ侍れど大かたの人ハ茶ハ湯と別ものゝやうに心得ゐてあつかへバ礼法もいとむづかしく東山に何庵とやら宗匠の建つる席に茶室をかまひてその好ハうるさきまでたゞしく注文到しに床柱を松にして節七ツある残好めり家に思ふにハいろあるだけふかく節数七ツある柱をもとむるにやといぶかしさに問ひければ師の建てる席の床柱の節七ツありけれバそのまゝを擬するなりといへり笑ふべきハ学ぶべきにあらずや師の造る出しこゝろを定めて節なき柱のなきまゝにふしある柱ハせられしなるべしさあれバいふに師ハおもとを慕へバさこそ疵あるものを求むるハ殊と削るハあらで顰にならひて師の疵残

あるを疵とはぢらるべしと思ひつこの席ハ見きまゝにせよかしといふにハあらずきこえたる通り茶道具を見せぬ所を何かふさくる孔時の間に会するを恥辱とハする形なるべしすべておもしろきをハ見せぬところにありて見せてよるに雅なるとハしらん人にそこかくせありてきびしくに好みを致せどもくせを捨ざるハ風流の道人にハあらず理に入て理を遁れざる人ならねバ茶好といふものゝ茶道のうへとハ思ハれ侍らずまたその立居かろかひなどおくゆかしき此の者を建祈く又家ふかく書ひおきて思へり何か書せこゝにげにもとくくと云ハれども無筆なりとて遂にかずなりぬ世ハあはれなりおもしろさに記念にあるじの造れる卒都婆を一本求む

しこゝへだるんでさかぬことのなりやめなへさなるがかねて書
ゑがものなり是を紛らすべしとて反古の中より一枚を抜き
出だしを与へて此書これ文左の如し

ゑやなく抜ずれども木なくするものを土でするものを
金なく揃へず木でする物を木にて作く土でする物を
土でするべし金なくなくざることの八金なくば銅鉄
八換ずるをもひて木土にて作りこれを金にてするはよろ
しからん妖篠与平とあり

常陸の国風子疫癘麻疹痘瘡など流行の病あるときは鹿
島大神へ祈念して里民歌を唄ひて踊をなすその歌に
誠やら伊勢と春日の御社弥勒の船が続いたさ舳艫へ

なる伊勢と春日の御社やしろでは何がおもしろい護摩
んごくは護摩をさいて御手洗ではちごが踊そこぞの護摩
をなんとたきそろ。氏子繁昌とこそきこそろ。

猫を飼ものの多くは猫やしなふことをしらず飯をあたふる
手膾しとて肉味を加ふ猫は常に厚味を食とする時は鼠を
とらぬ猫は麦をしまして味噌汁をうけてあたふべしその他は食物
をあたふべからず常に肉食をなすは肉なき時は必ずその
家をさりて魚肉を盗める人と言ふも名澄あり
影法師回答の文数あるかれし时より思ふこそ在く来で
しの写も離るるをれしこといへどもいらず親にもあらぬ子にこもあ
らず居つかひにもあらぬ妻にも何もすめれとにも何

らず只おのれ正直なるそのミなして父母の業をまなびて
よろこぶことなく怒ることもなくあきらむることなく楽しむこと
なしおのれ目に見ゆる者を友とすれバ是を只せんとするに
づらひ耳に聞ゆる者を友とすれバ是を学せんとするに煩
唖を友とすれども是をさとさんと欲するに煩ふ汝ハ元来有
なるによりて汝が身をまもるとも又汝が身によりて元有
とするこころをまもれバ影ハ己か影なるべし又
人の影なるべし

○飯盒の貴に弟猛子募るの勤めにおそるや明くれいとも明か
けれど飲食に乏しき人此世にある是とひとし其の法
たる孝に猛座の其を削りて冥理子湯の粉此洗ひあげしを捨

すノ務ハつゞり菜飯に酒の糟を加へ倹をまもりく大根葉
割麦の粗を食れり且に不務ノ此功業ありてひろく家内の繁
栄をてらす

○大宗女の貴子力を蔡子が薪を集る此労をたすけて八弁ハ□
が此廓此才をも除む

○さて其大宗此山に打者の其子が業を護るおこたらん
神仏を信ずるの法も神仏何体の下を結すびく念せざれ
バ感応あらじとぞさまバ天の恵を受んと祈る者も天乃なに
とく不私なかれする時ハ恵外しと只るとあるべからず人をまなし
えるも人と同じかるべし神の心を親此如し仏此心を光り
の如し天乃心ハ依怙なく人此心ハ人と同じ

人善に動かざるものは悪にも動かず一つの念なくば生ぜざるに一念彼念かしこに生じ転変してしばらくの間も止事なきものハ心より此出るところをよく知らざれバ悪を退けて善を行ふ事ありがたかるべし善なる人の本心にして常の持ところのこそれなり悪ハ念より起して外より入来るものなり耳目鼻口乃ち取次人の善なるあるじに告て万の事をなすハ召仕ふ人と同じこれ召つかふものに善をこのむあり悪をすくあり此二つを差別すれバ五常ミな是中に在つべしその主人の好なるところを致しく嫌つるとをさけぬるを私欲いづるところなり人として己の私を勝手にらしてよろづ行ふ時ハ独ましく囲碁の上手あるがごとし己にまされる人と囲碁きん転じて勝手を得バ私

欲をすてゝ変通する時ハ大節にのぞミて智力を尽すところなし行ひたるその及ざる所を歎しく学ざるところを恐るの外なし

主人ハおのれが仁のおよバざるを歎きて臣の不忠なるを怨べからず臣もおのれが忠の及ざるをなげきて主の不仁なるを怨むべからず親ハおのれが慈悲のおよバざるを歎きて子の不孝なるを諭すべし夫ハ妻の不貞を歎ずしておのれが和の及ハざるを歎くべし妻ハ夫の不和をなげかずしておのれが不貞なるをなげくべし兄ハ弟の不敬なるを歎かずしておのれが不愛のおよバざるを歎くべし弟ハ兄の不愛をなげかずしておのれが敬のおよバざるをなげくべし朋友たがひに人の不信をなげ

かくしておのれが誠の及ばざるを恥づべし君にして臣乃過
をかくすハ仁なり臣として君の非を隠すハ忠なり親子兄
弟夫婦朋友互に其過をかくす時ハ慈孝哀敬交順信譲に
おのづから其隠せる中にあるべし偽も表を包まずくのつくろひ
なしてやむべし飾るとも偽のためには誠の本を失ふべからず
老らくしく色なきハ無骨なりしく志をやはらかならず老
らく色なきハ慣貪にして邪見なり世に色気といふハある愛
敬のつやとうるはしくあまずがちに婬欲のくずあるハ古しく
色なきまゝも人まづらず農として色まなれバ拙盲たす子と
志らく色形なきハ巧くなく慶と志らく色なけれバ人間たゞ天
地の間何の色なくして八一日も世に立ちがたかるべし　孟子

ふいたる財宝色を好むの辨なかるべし
人倫備れ万般慈の心より出ざるときハ仁忠慈孝柔和愛敬そ
の信まづく多く人情なし親乃子をおもふ心死なんと覚悟し
たる心の底も誠なし此世心恋が慈慕よりいでゝ慈情なき時ハ
不仁の君忠を致すものなく不慈の親孝を求る者
なし問くハ顔淵が亞聖能せん此理をくわ志をが忘らる
るの事おもひやるべし　古哥子
慈せざるハ人たる心のあるまじし他れあそれも一尺よ見ぞ志る
鬢鏡隔云不年子君の眼鏡あり召付ふものをもし人と
恭さしめ慈怒に親の目鏡ある子をして善ことなさしむ君子
鬢鏡あり人の一寸と鏡方をも見ず少しく長身此一尺と見も

とのことを見せし我家の袖のくもりを日ゞに拭ふかのまじが磨
を見たりけるや假令照广天眼乃名鑑なりとも色なるに足らず
世人鬢鏡を懐にして他乃是非と世の善悪を見出すを
あるべからんといふ

藪積氏の老母昌夏尼は洛北なる幸斎道に隠居す風流世に
すぐれより發句門に見えてり庭お十畝ばかりを楽しみとして
蒔るとれし世人二王を名残しの柴と多り椋の菊を待なる
まさに蓬園に鶯日ごとに来り鳴くとよろこび揃ひてある
づらくずおもく洛東にあとおれども人によるかひさる古木なれ
ば人を雇ひて掃りあとむるに嵯峨に老木の大いなるありと
聞て多くの價を費して蓬園に栽らしむるに揃とる盛る日

よりしての鶯いづくへか行けん終に来らずなりぬ

六法牒張云綾羅珠繍をとく秋の月を造り庵のけずりしに
故の子うらむしきを廻るも宅級に入る意地なりとも其子に
浅瀬を渉るを我らざるなるべし土蛍の火を秤ひとつは呉
思色堂念多く紙をもてつくれる故蝶一張桑膚なる者の眸を
うかがふはこともあれ盗人として心を動さしむるをなかるべし
薄紙一重に世塵をさけ湿をのぞきて寝冷せず風をふせぐ時は
五濱にあるよりも涼しく書を見る時も蛍雪の窓よりも明
しぬぎさくなき姿を人に見せぬなり名優が妓衣は巧なる
まされ共画はまろめて屏風のうしろへ投込みに折目を西にやせと
も枕しかまくめ冬来まじる被りて霜雪のはげしきをも凌ぐ

ば一曲(きよく)にして六用(ろくよう)あり彼(かの)左宗(さそう)が舞(ぶ)のくるふたる子ハよくね

どゝまりし亭子名をもちつゝ六法(ろくほふ)の蝶(てふ)とよびならはしけるがなましゞ驚(おどろ)き

たる山(やま)乃奥(おく)にもおもひかけず死(し)にたちて延引(えんいん)してやがて出(いで)

じしくハあとをひろくなり

鶏尸乗親(のりちか)ハはじめて面打(めんうち)の上手(じやうず)なりしかどもひとゝせに一(ひと)つ

ハ打(うた)ず性得(せいとく)をこのみて碎(えい)く舞(ま)ふさまを写(うつ)しむる打(う)ちける

老母(らうぼ)のいのりなるをもちて米(こめ)の櫃(ひつ)にハ蜘(くも)の巣(す)をかけさり動(つと)めて

打(う)つべきにやとせめければ乗親(のりちか)おどろきてさあらば翁(おきな)よろし

て悩(なや)らバ打(う)つべき品をこそ篝なるが四五日を経て面(めん)を打(うち)て

あつらへたるきへ持行(もちゆき)料(れう)を持(もち)きりて母(はゝ)まいらせしかバ母(はゝ)よ

ろこびてさいはひなる多くの金(かね)を得(え)しハ面(めん)いくつ打(うち)たるやとゝふ

にハおもて打(うち)たりけれども終(つひ)に子多くなるかその中(うち)に七面(しちめん)あれ

おなじく家子(いへこ)のこりてよく道具(どうぐ)おし入れおきし鬼女(きぢよ)の假面(めん)あり

けれバ見るさへおそろしさて僕子(ぼくし)おきなりける此夜(このよ)盗人(ぬすびと)入りて

親子(おやこ)臥(ふ)したるを伺(うかゞ)ふと見て母乃鬼面(きめん)を顔(かほ)にあてゝ眼(め)の

穴(あな)より見まもりやよ盗人(ぬすびと)の入りたるぞ乗親(のりちか)おきよといひながら盗(ぬす)

人(びと)見てあとさけびおどろきいでくともあし逃失(にげうせ)ぬとぞ

藤田氏所藏

14